

衝立の乙女

古い日本の作者、白梅園鶯水は云ふ、——

『支那と日本の書物に——古代現代兩方の——澤山の話がある、それは繪が餘りに綺麗なので、見る人に神祕的な力を及ぼす話である。そしてこんな綺麗な繪に關して、——名高い畫家の描いた花鳥の繪でも、人物の繪でも、——さらに云はれて居る事は、そこに描かれた動物や人物は、その紙や絹から離れて色々の事をする、——それでその繪は、その繪の意志で、實際生きて出ると云ふのである。昔から誰にでも知られて居るこの種類の話を、今ここにくりかへす事はしない。しかし現代に於ても、菱川吉兵衛師宣の描いた繪——「菱川の繪姿」——の評判はこの國では博く知られて居る』

彼はそれから進んでその所謂繪姿の一つに關するつぎの話を述べる、——

京都に篤敬と云ふ名の若い學生がゐた。彼は室町と云ふ町に住みなれてゐた。或夕方、人を訪れて歸る途中、古道具屋の店さきに賣物に出てゐた古い衝立に目がとまつた。それはただ紙の衝立であつたが、その上に描いてあつた若い女の全身像が、若い人の心を捉へたのであつた。賣價

は安かつた、篤敬は衝立を買うて、家へもつて歸つた。

自分獨りの淋しい部屋に置いて、その衝立を眺めて居ると、その繪よりも一層綺麗に見えるやうであつた。たしかにそれは本當の似顔、——十六七歳の少女の肖像であつた、繪の中の髪、眼、^{まぶた}睫、口のどの小さい點までも、賞讃に餘る程丁寧に眞に迫るやうに描いてあつた。まなじりは『愛を求むる芙蓉の花のやう』であつた、唇は『丹花の微笑のやう』であつた、若い顔全體は何とも云へない程美はしかつた。そこに描いてある元の少女がそれ程に美しかつたら、見る程の人は何人も心を奪はれたであらう。そして篤敬は彼女はこのやうに美しかつたに相違ないと信じた、——即ち、その姿は、話しかける人だれにでも、今にも返答する用意をして居るやうに、——生きて居るやうに見えたのであつた。

繪を眺めて居ると、次第にその魅力によつて魅せられるのを覺えた。『實際この世の中にこんな美しい人が居るのだらうか』彼は獨りでつぶやいた、『暫らくの間でも（日本の作者は「露の間」と云つて居る）自分の腕でこの女を抱く事ができたら、喜んで自分の生命——いや、千年の生命——をも捧げたいのだが』結局、彼はその繪を戀するやうになつた、——即ちその繪が表はして居る人でなければ、どの女をも決して愛する事はできないと感ずる程にその繪を戀した。しかしその人は未だ生きて居るとしても、もはやその繪には似てゐないだらう、恐らく彼女は彼が生れるずつと以前に葬られたかも知れない。

しかし、毎日この望みのない熱情が彼に生長して來た。飲食も睡眠もできなくなつた、これまで興味をもつてゐた學問研究にも心を向ける事ができなかつた。彼は、何時間でも繪の前に坐つて、——外の事は一切なげやつて、或は忘れて、——その繪に話しかけてゐた。そしてたうとう病氣になつた——自分でも死ぬだらうと思ふ程の病氣になつた。

さて篤敬の友人の間に、古い繪や若い人の心について多くの不思議な事を知つて居る一人の尊敬すべき老人の學者がゐた。この老人の學者が、篤敬の病氣を聞いて、彼を訪問した、そして衝立を見て、その事の起りをさとつた。それから篤敬は問はれるままに、一切の事を白狀して、そして公言した、——『こんな女を見つけれなかつたら、私は死にます』

集 雲 八 泉 小

老人は云つた、——

『その繪は菱川吉兵衛が描いた物だ、——寫生だ。その描かれた人物はもうこの世にゐない。しかし菱川吉兵衛はその女の姿ばかりでなく、心も描いた、それからその女の魂が繪の中に生きて居ると云はれる。それで君はその女を自分の物にする事ができると、私は思ふ』

篤敬は床から半分起き上つて、相手の顔を見つめた。

『君はその女に名をつけねばならない』老人は續けた、——『そして毎日その繪の前に坐つて、一心不亂にその女の事を思うて、君がつけた名で靜かにその女を呼ぶのだ、返事をするまで……』

『返事をする！』息をしないで驚いて、その愛人は叫んだ。

『さうとも』助言者は答へた、『女は必ず返事します。しかし君は、女が返事したら、私がこれから云ふ物を贈るやうに用意してゐなければならぬ。……』

『私は女に生命をやりませう』篤敬は叫んだ。

『いや』老人は云つた、——『君は百軒の違つた酒店で買つた酒を一杯女にさし出さねばならぬ。さうすると、女はその酒を受けるために衝立から歩いて出ます。それから先きは、どうすればよいか、多分女は自分で君に云つてくれるだらう』

さう云つて老人は去つた。その助言は篤敬を絶望から救つた。直ちに彼は繪の前に坐つて、女の名を呼んで——（どんな名だが、日本の作者がそれを告げる事を忘れて居る）——甚だやさしく、度々くりかへした。その日は返事はなかつた、その翌日も、又その翌々日も。しかし篤敬は信仰も忍耐も失はなかつた、それから幾日も経たあとで、或夕方突然、それが、その名に答へた、——

『はい』

それから早く、早く、百軒の違つた酒店から買つた酒を少し、小さい盃に注いで、恭しく彼女に捧げた。そこで女は衝立から出て、部屋の上を歩いて、篤敬の手から盃を取るために跪いて、——やさしい微笑と共に問うた、——

『どうして、そんなに私を愛して下さるの』

日本の作者は云ふ、『彼女は繪より遙かにもつと綺麗であつた、——爪のさきまでも綺麗、——心も氣分も又綺麗、——この世の誰よりも綺麗であつた』篤敬は彼女の間に對して何と返事したか書いてない、それは想像に任せるのである。

『しかし、あなたは私をちきにお倦きになるのぢやありませんか』彼女は問うた。

『生きて居る間は決して』彼は抗言した。

『それからあとは——』彼女は主張した、——即ち日本の花嫁はただ一生の間の愛だけでは満足しないから。

『お互に誓ひませう』彼は懇願した、『七生の間變らないやうに』

『あなたが何か不親切な事をなさると』彼女は云つた、『私衝立に歸ります』

彼等はお互に誓つた。私は篤敬は忠實な人であつたと思ふ、——花嫁は衝立へ歸らなかつたからである。衝立の上に彼女のゐた場所は空地になつたままであつた。

日本の作者は叫ぶ、——

『この世にこんな事の起るのは、なんと稀有な事であらう』

(田部隆次譯)

The Screen-Maiden. (Shadowings.)